

### Ⅲ 沖縄県のカツオ漁業とカツオ餌料について

#### 1 カツオ釣餌料魚について

琉球水産研究所・資源調査研究室

カツオを釣る時は小魚を散布して船に誘い寄せ、小魚を餌とし、又は擬餌を使って釣りあげるが漁獲量は餌の量及び質（種類、生きのよさ）によって大いに左右される。

沖縄県におけるカツオ釣漁業は沖縄に導入されて以来70余年になるが、その間、餌は本漁業の発展を阻害する大きな要素となっている。

沖縄におけるカツオ釣漁業を発展させるためには多くの解決すべき問題が存在するが、そのうちでも特に餌料問題が重要である。一本釣や鮪延縄漁業に使うサンマ等の死餌と違ってカツオ釣漁業には活餌が絶対必要である。

游泳中のカツオ群を船側に近づけるために散餌を行なうが、この時、餌魚は生きていてしかもできるだけ表層に浮き、舷の側にいるような習性をもった小魚で大量に採集できるものでなければならない。かような条件を満たす餌料魚類はおのずから限定されていて、本土では主としてカタクチイワシを、ハワイではネーフと称するイワシ類を使用している。沖縄ではテンジクダイ類、アカムロ、キビナゴ、バカジャコ等を使っているが、いずれも継続して大量に採れないので、例年餌料不足の声が絶えない。カツオ業者自体もいろいろ努力をして餌料確保に懸命であるが、その打開策は計画倒れになったり、完全に実施できなかったきらいがあった。

餌料は常に不足状態にあるが、実際には年間どれだけの量が採取されているであろうか。表Iに1966年から1968年までの3年間の数量を示した。

1966年～1968年 カツオ餌料採取量変化

地区	項目	年次		
		1966年	1967年	1968年
全琉球	採取量 (隻数)	(62) 273.7トン	(52) 243.5トン	※ (52) 236.2トン
	1隻当り 採取量	44トン	46トン	※ 45トン
座間味	採取量 (隻数)	(4) 71.7	(3) 54.2	(3) 61.8
	1隻当り 採取量	17.9	18.0	20.6
池間	採取量 (隻数)	(9) 15.6	(6) 27.0	(7) 15.3
	1隻当り 採取量	1.7	4.5	2.1
石垣	採取量 (隻数)	(26) 57.1	(24) 83.3	(25) 97.6
	1隻当り 採取量	2.1	3.4	3.9

表I ※竹富町の報告未着のため一部集計もれ

資料：水産部「カツオ釣報告書」1966～1968

全沖縄についてみると総計では減少傾向にあるが、これは従事船隻数が少なくなっているためである。にもかかわらず、年間約258トンの採取量があり、1隻当りの年間採取量は約4、5トンで年変動がほとんどない。地区別にみると座間味では総採取量は減少しているが、1隻当りでは逆に年々増加している。池間は一定しない。石垣をみると、総量1隻当りの採取量とも年々増加傾向にある。座間味と池間、石垣との間に1隻当りの採取量が大きく異なるのは、使用する餌の種類が若干異なることや、船型の大きさの相違

によるものである。

表Ⅱ カツオ餌料種類

魚 種	%	出現時期	盛 期
テンジクダイ類	30.7%	4~10月	6、7月
アカムロ	20.0	6~10月	6、7、8月
キビナゴ	17.2	4~10月	6、7月
ガツン	10.1	8~10月	9月
バカジャコ	5.6	4~10月	一定せず
タレクチ	4.3	4~6月	5、6月
ミズン	4.0	—	—
コノシロ	2.8	5~9月	6、7月
シイラ	2.7	4~10月	7、8、9月
ヒカー	1.8	5~10月	8、9月

表Ⅱに種類別の割合、出現時期及び最盛期を示した。これからテンジクダイ（ウフミー）、アカムロ（サネラー）が全体の約50%を占める。石垣、座間味はウフミー、アカムロの出現すると5、6月頃からカツオ漁にはいる。キビナゴ、バカジャコ、タレクチ等は餌料としての効率は良く、かつ集魚灯下に誘集する魚種で、総量に比べると僅かである。本部、渡名喜、池間、竹富あたりでは主要なものである。その他ガツ

ンやミズン等は晩夏から秋にかけて大量に出現し利用されているが、その量は15%前後に過ぎない。これらの餌料魚はいずれも沿岸性のもので、どちらかといえば、春から初秋にかけて沿岸に来遊する時期的なものである。

これらの餌をとるための漁法には追込漁法と集魚灯による火光利用漁法が代表的なものである。

火光利用漁具として本部で使用している四艘張網は、運天港、羽地内海、渡久地地先等の水深10~15m位のところで操業している。

従事する船は5トン未満船1隻（本船）、くり舟3隻で水中集魚灯（250~500w）を使い16~20人程の漁夫で大体1晩に2回操業している。この漁法は月明時には追込併用となっている。獲れるのはタレクチ、キビナゴ、ミナミキビナゴ（シイラ）等である。

追込網は宮古、八重山、座間味で行なっており、依然として餌取りの大部分はこの漁法漁具に頼っている。追込漁法は沖縄古来の伝統的なもので、従事する漁夫は特殊な潜水技術をもっており有名をはせている。主としてぐるくん（タカサゴ）トビウオを対象としての漁法であるが、カツオの餌取り用にも行なっている。すなわち漁夫の一群が水中に入り水面を叩きながら泳ぎ、又はブリ縄、石等をもってリーフや岩の間にいる魚を追出し、網に追込む漁法である。

網の規模、裁断方法、漁具の敷設状態等は地方により一定していないが、大体2~40メートルのところに敷設し、20人前後の漁夫が従事する。袋網の浮子方は約20メートル、袖網の浮子方は約10メートル程で高さは2~4メートルである。獲れるのは、バカエサ、ウフミー、アカムロ、ヒカー等である。これまで餌取り漁業の概略について述べてきたが、これらの中に問題点及び改善すべき面が見い出せるであろう。すなわち本部では集魚灯に誘集するようなイワシ類が主体であるが、アカムロやウフミーはほとんど利用していない。先島（宮古、八重山）では追込み漁法で獲れるウフミー、アカムロが主体で、キビナゴ等のイワシ類はあまり利用されていない。但し池間はイワシ類のバカエサが主体である。